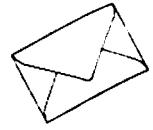


読者からの手紙

身近な環境教育 ① 石碑



進士五十八 (東京農業大学農学部造園学科/教授)

環境教育を教育学の一領域として捉えることは妥当でない。

教育そのものの目標とも一致すると思うのだが、環境が人間の生き方や生活のなかでどのように重要な意味をもつものかを理解できるような手段や状況を用意することが環境教育だと思うからである。教育学の体系ではなく環境施策や環境運動の体系のなかで「環境教育」を位置づけるべきで、そういう意味では「環境学習」の方が的確ではないかと私は考えている。

児童か成人かは問わず、環境教育の受け手の市民の側からの視点は「環境学習」の語感に近い。



このように考えると、私たちは既にたくさんの環境学習の手段をもってきた。殊更環境教育とは言わない段階で、「環境学習」環境は存在していたということである。

題して、「身近な環境教育」。今回は『石碑』をとりあげてみたい。

山形県南部、米沢市など、置賜地方を中心に珍しい石碑が65基ほど分布している。その名は「草木塔」、「草木供養塔」で、時に「材木供養」や「財木供養」と刻まれたものもある。最古のものは江戸中期(安永9年、1780年)で、米沢10代藩主上杉鷹山の治政下。財政再建・殖産興業政策の一環で漆や桑など百万本植樹計画が推進されていた時期であり、直接は安永の大火で米沢城下120戸が焼失、藩の「御林」から伐り出した大量の木材が復興に当てられたことに端を発する。人々は木材に感謝し、伐り出した跡に杉苗を植え、樹の精霊を供養、草木の生長と成仏を願ったのである。草木塔の碑文のなかに

「草木国土悉皆成仏」の文字が見えるものもあって、自然崇拜の山岳信仰の担い手の山伏との関係もあったようだし、危険な重労働を伴う「木流し」作業に従事する林業の村の信仰による連帯のシンボルとして建立されたものもあったようである。

いずれにせよ、材木として、又牧畜の飼料として、私たち人間は樹木や草の生命を奪うことで生かさせてもらっているという感覚を忘れないこと。このことは、人間が自然と関係するときの基本的な倫理である。

精細な科学的データで自然環境の有限性を認識した上で行動するというのが環境教育の第1ステップであるが、それ以前に、自然に感謝する心、生命を大切にすること、それを形で表わす行動を



とること、がなければ何にもならない。

「草木塔」は現代にこそ求められるものである。

同様の趣旨の碑が高知市外、月の名所の桂浜かつかはまにあった。碑文は自然と歴史の大切さを訴えている。何時、誰が建てたかわからない。

「古キ樹木ハ此地ノ歴史ヲ語ルモノナレバ之ヲこゝ愛護セラレタシ」

